

第一章 序論

第一節 研究動機

和歌は漢詩に対して、日本固有の詩歌の称である。人間のすべての感情、世界のあらゆる様態が、三十一文字に凝集されて、時間と空間無限の、幻想的な世界を展開している。つまり、和歌とは日本人独自の美意識を表現する物だと言える。

平安文学といえば、様々な文学ジャンルが認められるが、大半のジャンルには和歌が見られよう。このことから、和歌は平安文学には掛け替えのない重要な位置を占めていることが言えるのである。

日本の和歌といえば、『万葉集』、『古今和歌集』（以下、『古今集』と略称する。）『新古今和歌集』が日本和歌の代表として挙げられる。

『万葉集』の歌は素朴で、率直な歌調の作が多いとされる。『古今和歌集』の歌は繊細で、女性的で、巧みな技巧が用いられ、繊細優美の姿態美を持つと言われる。『新古今和歌集』の歌は、唯美的・情調的・幻想的・絵画的・象徴的・技巧的などの特徴が挙げられ、「余情妖艶」の美意識が漂っており、より華やかな技巧にあふれていると考えられている。この三つの作品を比べれば、『万葉集』はより素朴であり、『新古今和歌集』は妖艶で、匠気が多すぎるが、『古今集』は巧みに縁語などの修辞法を運用し、繊細に風景を描いたり、作中人物の心境を表現したりしている。筆者は『古今集』の持つ繊細優美の姿態美に心を惹かれるのである。したがって、本論文では『古今集』の歌々を考察し、『古今集』の世界を探究したい。

『古今集』は歌数約一一一〇首で、二十巻からなる。本文は、春（上下巻）・夏・秋（上下巻）・冬・賀・離別・羈旅・物名・恋（巻一～巻五）・哀傷・雑・雑体・大歌所御歌に分類されている。その中で、恋の歌は五巻で、三百六十首ある。歌数から見れば、『古今集』の三分の一ほどである。このことから、恋歌が『古今集』においては重要な位置を占めており、恋歌を考察することは、『古今集』世界の解明には重要な意義を持つことがいえよう。

一方、平安時代の男女の交際には、和歌は欠かせないものであった。一首の和歌を通して、恋しい人への思念、変心した人への怨み、様々な情緒が伝えられる。それだけでなく、一首の和歌で、別れた恋人の心を取り戻すことさえできる。恋の歌はなぜこのような力を持つのであろうか。筆者はこの点について非常に興味を持っており、追究したい。したがって、ここでは『古今和歌集』の恋歌を研究対象としたのである。

第二節 研究目的

『古今集』の二十巻の中で、四季歌は六巻あり、恋歌は五巻ある。また、歌数から見ると、『古今集』の一〇〇首の中で、四季歌は三百四十二首占めていて、恋歌は三百六十首占めている。つまり、恋歌と四季歌は『古今集』の二つの柱である。四季歌は季節の推移に従って配列されている。恋歌は恋愛初期から破局に至るまで、恋愛過程に従って配列されている。

前節で述べたように、筆者は男女の交際に欠かせない和歌に興味を持っている。このような歌は『古今集』の恋部に多く見られる。ここで『古今集』の恋歌を研究対象とした。恋に関する描写は様々である。人により、時間により、空間により、表現が違う。果たして『古今集』における恋歌はどのように表現されているのか。そういう表現は「恋」の本質、「恋歌」の本質とはいかに繋がっているのか。本論ではこれらの問題を究明したい。

一方、『古今集』には多くの対照関係が存在している。たとえば、『古今集』の部立てから見ると、「公」と「私」との対照が認められる¹。それに、読み人知らずの歌は「古」の歌に属し、それ以外の歌は（例えば撰者時代の歌）「今」の歌に属するように、「古」と「今」との対照もある。さらに、「能動的な歌」と「受動的な歌」との対照²、また「男」と「女」との対照、そして、「情」と

¹ 藤井貞和氏が「古今集の心と詞」（『古今和歌集研究集成第1巻—古今和歌集の生成と本質』所収、風間書房、2004）という論文において、『古今集』の部立て「春・夏・秋・冬・賀・離別・羈旅・物名」を「公的な（晴の）うた」、「恋・哀傷・雑・雑体・大歌所御歌」を「私的な（褻の）うた」に分類した。

² 鈴木宏子氏が「古今集の恋歌」（『古今和歌集研究集成第2巻—古今和歌集の本文と表現』所収、風間書房、2004）という論文において次のように述べた。

「景」、「心」と「物」との対照関係も歌の中に用いられる。このことから、対照表現という技法は、『古今集』の世界を理解するのに重要な要素だと見られるのである。

実際に『古今集』恋歌に見られる対照表現を挙げてみれば、「今来むと言ひしばかりに長月の有明の月を待ち出でつるかな」（恋四、六九一）という素性法師の名歌には、「朝」と「夜」の対照が読め取れる。そして、在原業平の名歌「月やあらぬ春や昔の春あらぬわが身がひとつはもとの身にして」（恋五、七四七）という歌には、「今」と「昔」、つまり時間的な対照が存在する。なお、小野小町が詠んだ「思ひつつ寝ればや人の見えつらん夢と知りせばさめざらましを」（恋二、五五二）、「うたた寝に恋しき人を見てしより夢てふ物はたのみそめてき」（恋二、五五三）といった一連の「夢」の歌にも、「夢」と「うつつ」との対照も認められる。

果たして、これらの対照表現は、『古今集』恋歌には如何なる存在であり、どのような意義を持っているのであろうか。作者は如何にこれらの対照表現を用い、恋人たちの心境を表しているのか。これらの問題を明らかにするのがこの論文の目的である。

第三節 先行研究

『古今和歌集』に関する研究は枚挙に遑がないので、本節は戦後の『古今集』研究を中心に見たい。また、『古今集』研究は、漢文学との関係、表現論と修辭論、本文と諸本の研究、歌人研究などいろいろな面から探究できるものであるが、本論は「『古今集』における恋歌の表現—時間的な対照表現からのアプローチ」を題としたため、先行研究に対する検討は『古今集』の表現論と『古今集』の恋歌に関わるものに限定したい。

1. 『古今集』表現論に関わる先行研究

恋歌の中にも、『見る』『忍ぶ』『逢うことを欲する』といった能動的な歌は<男>の恋歌であり、『待つ』『あき』『忘らるる身』といった受動的な歌は<女>の恋歌であるという性差が考えられよう。

鈴木日出男氏は「和歌の表現における心物対応構造」³という論文では、和歌の表現形式における「心物対応構造」論を唱えた。氏の論点は、次の二点にまとめられよう。

①『万葉集』と「心物対応構造」：和歌の表現方法から言えば、心情を表現する類句的な言葉と、物象を描写する言葉とを対応させる方法がある。それは、すなわち「心物対応構造」というものである。いわゆる「心物対応構造」とは、事物現象を表す句と、自己心情を表現する句とを対応するものである。『万葉集』における「序詞」と「類歌性」などの歌々にはこういう「心物対応構造」が目立つ。

②『古今集』と「心物対応構造」：『古今集』の時代の歌人たちは、万葉の歌人たちと異なり、実際に自然に触れることよりも、想像中の自然を多く歌に詠んでいたのである。それは、『古今集』の時代の歌人たちは都市に明け暮れるという生活形式とは無縁ではない。言い換えれば、『古今集』の時代の歌人の自然観が既に変質し、『万葉集』時代のように自然を詠むことができなかった。ゆえに、「序詞」と「類歌性」の代わりに、掛詞、縁語が発達し、序詞に代表される対応構造の変形である。和歌表現の伝統性、すなわち対応する重層構造が捨てきれないので、その変形が起こったのであろう。掛詞もその機能からいえば、二つの意味概念の対応する重層構造になっている。その一方の意味概念がほとんど物象、しかも多くが天象景物を示しているのであり、そしてもう一方の意味概念が人間や人間の心を表わしている。縁語、見立て、擬人法なども、ほぼ等しい意味がある。『古今集』に表現技法が変化したが、その表現の根源に、言葉の対応重層、つまり言葉の対応する重層構造という点での伝統性が保たれていたという。

要するに、氏によれば、事物現象を描く語句と、人間の心情を描く語句とが対応するという「心物対応構造」が和歌の表現形式として認められ、それが『万

³ 鈴木日出男「和歌の表現における心物対応構造」【初出は『国語と国文学』第47巻第4号（至文堂、1970）。のちに『古代和歌史論』所収（東京大学出版会、1990年）】

葉集』のみならず、『古今集』にも存在しているという。「心物対応構造」における「対応」という概念は本論で探究したい「対照表現」とは似ているが、「心物対応構造」で強調されたものは、歌の中の「心」と「物」との「対応」関係なのである。

いわゆる「対応」とは、互いに向きあうこと、相対する関係にあることである⁴。つまり、「対応」の重点は、物と物との相対関係にある。それに対し、「対照」とは、他と照らし合わせること、見くらべること、くらべ合わすこと、対比することなのである⁵。つまり、「対照」の重点は、物と物との比較にあるのである。「対応」と「対照」とは似たような表現だが、本論で探究したいのは、和歌における二つのものの相違点が著しく際立って見える表現であるため、「対照関係」という概念を中心に考察を行った。それと同時に、本論の副題を、「対照表現からのアプローチ」と付けた。

さて、『古今集』の表現論に関しては、片桐洋一氏は、「古今集的表現の本質」という論文においても多く指摘している⁶。その中で、氏は『古今集』の表現のポイントは、縁語・掛詞などを駆使した技巧的な修辞ではなく、根本は「心」を外界の事物に託して表現すると言っている。氏のこの論点について、筆者はただちに賛同することができない。なぜなら、修辞法は和歌の表現に形成する欠かせない一環であるし、「心」を外界の事物に託して表現する場合においても、修辞が重要な働きをしているからである。したがって、『古今集』の表現を考察する際に、やはり修辞法を見逃してはならないものだと見るべきであろう。

ほかに、『古今集』における表現の本質について、それは日本人の心を「見るもの」「聞くもの」に託して表現する詠み方だと考えている。氏の指摘は、『古今集』の仮名序に記されている、「やまとうたは、人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける」という和歌の本質に通じていよう。すなわち、氏の指摘した、『古今集』の歌々を、「心」と「景物」を完全に一体化して、みご

⁴ 新村出編『広辞苑第五版』（岩波書店、1998）p1534。

⁵ 同上書、p1545。

⁶ 片桐洋一「古今集的表現の本質」（『古今和歌集研究集成第1巻—古今和歌集の生成と本質』所収、風間書房、2004）。

とな心象風景を作り出しているものとして捉えているのである。氏の認めた「心物一体」は、鈴木日出男氏の指摘した「心物対応構造」とは、一つの事象を「心」と「物」との二方面において分析することができるという点において共通していよう。

鈴木、片桐二氏の論述をまとめれば、『古今集』における修辞技巧および表現の本質は、すべて「心」を事物に託した結果であること、また、心象と物象とは同時に歌に存在していることを捉えることができよう。

二氏のほかに、『古今集』の表現について、小町谷照彦氏の論説も認められる。

小町谷氏は、『古今和歌集と歌ことば表現』⁷では、歌ことばの確立をはじめ、歌枕の表現形式、『古今集』に登場した歌人たちの歌語の活用などについても考察した。氏の考察によると、『古今集』は表現性が豊かな歌語を運用し、修辞技巧を駆使して、心情を具象的な形で表出した文学空間であるという。

ここにおいて、小町谷氏の研究は『古今集』の単一の歌ことば表現に集中していて、「歌ことば表現」から古今集的美学を探究したものだといえられる。

以上、三氏の研究をまとめれば、すなわち、鈴木氏は「心物対応構造」論を提出し、さらに、その視点で歌を分析した。片桐氏は、いわゆる修辞とは「心」を事物に託した結果なのだと指摘している。小町谷氏は各歌の単一の歌ことば（例えば、「音に聞く」、「恋死ぬ」など）の表現に注目し、歌ことばは『古今集』の表現性に対して重要な存在なのだと見ている。三氏のうち、鈴木、片桐二氏は、心物の対応また心物の一体といった関係を言及したが、『古今集』の歌における「対照表現」についても、またその中の「時間的な対照表現」についても、考察していなかった。小町谷氏の論も主に歌ことばを考察するもので、「対照表現」という主題に触れていない。

2. 『古今集』恋歌に関わる先行研究

『古今集』の恋歌に関しては、従来の研究で、殆ど『古今集』恋歌の構造や

⁷ 小町谷照彦『古今和歌集と歌ことば表現』（岩波書店、1994）。

配列に着目している。

たとえば、田中常正氏が『万葉集より古今集へ』というシリーズの研究書⁸で、『古今集』恋歌の構成と配列を考察した。氏は主に『古今集』恋歌における『万葉集』からの影響、『古今集』恋歌の構成（読人知らずの歌、六歌仙の歌、編纂者の歌に分けられて論及するもの）などを考察しており、『古今集』恋歌の表現論にはあまり言及していなかった。

また、『古今的世界の研究』を著した菊池靖彦氏が『古今集』の恋部の構成と恋歌作者を分析し、『古今集』の恋歌を「恋愛前期、恋愛成就期、恋愛後期」と三段階に分けて論じた。さらに、各期の歌の数から、『古今集』恋歌を「恋愛の成就から詠われるものではなく、忍ぶ恋、悲恋の歌を中心とする」と定義した⁹。菊池氏の研究は恋歌の構成と作者に集中したものと見られる。

ほかに、鈴木宏子氏の研究があるが、氏は『古今集』恋歌の表現に集中している。

鈴木氏は『古今和歌集表現論』において、歌ことばから『古今集』恋歌の表現を探っていた。恋歌の中に重要な意味を持つ用語を指標とし、分析研究した。鈴木氏の研究要点は歌語における『万葉集』から『古今集』への継承と変化（類型句から歌ことばへの変化）に置いたのである。氏は各和歌の特有の歌ことばを比較して、『万葉歌』に見られない歌ことばを通し、『古今集』の多様な表現力を証明した。

このような考察のプロセスを通じ、鈴木氏は、『古今集』の恋歌という「歌の文体」には、「時」の推移が内包されているのであり、それが『古今集』恋歌表現の特質なのだと指摘した。

⁸ 田中常正氏の『万葉集より古今集へ』シリーズ（笠間書院）は三冊からなる。各冊のサブタイトルと出版年は次のようになる。

第一：古今集恋歌の読人知らずの歌の構成（1987年）
第二：六歌仙・編纂者の恋歌の構成（1989年）
第三：恋の心情の進展とその歌の配列（1998年）

⁹ 解釈は菊池靖彦『古今的世界の研究』（笠間書院、1980、p 161）による。

また、氏は「古今集の恋歌」という論文では次の在原業平の歌を考察した¹⁰。

起きもせず 寝もせで夜を 明かしては 春の物とて ながめ暮らしつ
(古今・恋三・六一六、在原業平)

この歌に関して、氏は「せず」「せで」という二つの否定形に注意を払いつつ、「起きる」と「寝る」とは対立していることに注目しているのである。氏によれば、この歌を全体から見れば、業平が否定の句を重ね、夜と昼とを対比することが認められるという。さらに、氏は、業平の歌の特色を、大胆な反実仮想、二つのものを対比的に捉える発想、否定や疑問を重ねる表現などにあると捉えているのである。以上は、業平の歌を中心に考察したものなので、その考察結果は『古今集』全体に適用できないかもしれないが、業平の歌で用いられた「対比」という観念を指摘することが意味深い。ただし、残念ながら、氏は単に「対比」という観念の提起にとどまり、この点をさらに深く追究することはなかった。

さて、氏の指摘した「対比」とは、二つのものを突き合せてくらべること、あるいは比較することというのである¹¹。これは本論で探究したい「対照」とは意味上には大差がないと思われる。

なお、同論文では氏もまた、『古今集』の恋歌における「能動的な歌」と「受動的な歌」、「女性的なもの」と「男性的なもの」、という対照関係を指摘した。しかし、これに関しても、氏は「〈見る〉〈忍ぶ〉〈逢うことを欲する〉といった能動的な歌は〈男〉の恋歌であり、〈待つ〉〈あき〉〈忘らるる身〉といった受動的な歌は〈女〉の恋歌である」¹²という現象を指摘しただけで、対照関係については深く論及していなかった。

¹⁰ 鈴木、同前掲注2論文。

¹¹ 広辞苑、p 1555。

¹² 鈴木、同前掲注2論文。

以上の三氏の先行研究をまとめてみると、『古今集』恋歌についての研究は、恋歌の構成や配列、あるいは、歌ことばや歌語などを中心として考察されてきたことが分かる。

ところが、先行研究の中では、『古今集』の表現論また恋歌の構造に少し触れているものがあるとしても、「対照表現」を中心に考察するものが少ない。このことから、『古今集』恋歌における対照表現に関してはまだ研究の余地が大きいといえよう。したがって、本論では従来の研究成果を踏まえて、「心物対応構造」、「女性的なもの・男性的なもの」という対照表現の技法が如何に『古今集』恋歌に用いられたのか、それが歌にはどのような働きを有しているのかなどの問題を考察したい。

ただし、対照表現といえば、様々ある。たとえば、「男と女」「朝と夜」「昔と今」などが挙げられる。その中で、『古今集』恋歌は恋の進行、時間により配列されたので¹³、本論では「時間的な対照表現」を中心に考察したい。

第四節 研究方法

本論の目的は『古今和歌集』の恋歌の表現を探究することなので、恋歌の五巻(『古今集』の巻第十一から巻第十五まで)を研究範囲に設定する。

また、本論では時間的な対照表現を中心に考察したいため、歌々を類別し、同質の歌をまとめる。さらに、各類の歌における対照表現を分析し、各歌における対照表現の意義を考察したい。

さて、『古今集』に関わる時間的な対照表現については、「朝と夜」、「夢とうつつ」、「昔と今」、「今と将来」、「長と短」といった主題が認められる。そのなか、「朝と夜」は十一首、「夢とうつつ」は二十四首、「昔と今」は十一首、「今と将来」は二首、「長と短」は二首ある。本論では、歌数の多い「朝と夜」、「夢とうつつ」と「昔と今」といった三つの主題に関わる歌のみ検討したいと思う。ただし、この三つの主題はやはり歌数が多い。それらを

¹³ 松田武夫氏は『古今集の構造に関する研究』(風間書房、1965)において、恋歌五巻を「不会恋」、「会恋」、「会不会恋」に分けている。それに対し、菊池靖彦氏は『古今的世界の研究』(笠間書院、1980)において、「恋の前期」、「成就期」、「後期」に分けている。

一々分析する余裕がないだろうと考慮する上、また、同じ主題下の歌はやはり近似する性質を持つことを考えた上、本論では、すべての歌を分析せず、各主題の特色を明らかに示す歌だけを取り上げ、考察を行いたいと思う。

本論の構成と展開は下記のとおりである。

第二章では、まずは和歌と恋歌の本質から論を展開する。次は、恋歌の本質に基づき、『古今集』恋歌の本質を把握しようとする。それから、『古今集』恋歌の構成を検討し、そこから『古今集』恋歌における時間的な特質を分析する。さらに、その時間的な特質から、「朝と夜」、「夢とうつつ」、「昔と今」といった対照表現が『古今集』恋歌に存在することを確認する。

第三章では、「朝と夜」の対照表現を中心に考察する。そして、その中から、「特定の朝と夜」と「不特定の朝と夜」との二つの主題に分けて、『古今集』恋歌における朝と夜との対照表現を探究する。

第四章では、「夢とうつつ」の対照表現を中心に考察する。その中から、「夢で逢いたい」→「夢でさえ逢えない」→「夢で逢えた」→「うつつで逢えた」→「夢で逢えなくなった」という順に沿って、『古今集』恋歌の夢とうつつとの対照表現を究明する。

第五章では、「昔と今」の対照表現を中心に分析する。そして、その中から、「逢う前の昔と、逢ってから今」と「愛し合った昔と、別れてからの今」、この二つの主題に分類し、歌に見られる「昔」と「今」との対照表現を考察し、歌における対照表現の意義を探求する。

第六章は結論である。各章のまとめの部分を整理し、『万葉集』との比較を通し、『古今集』恋歌における対照表現の重要性を検討する。また、今後の課題についても述べる。

本論では以上の六章により、『古今集』恋歌を対照表現という視点からアプローチしたい。

最後に付言として、本論で引用した原文、現代語訳と歌番号は二〇〇四年に出版した『新編日本古典文学全集 11—古今和歌集』の第一版第四刷の内容によったものである。